





登山のために、訪れたいいくつかの国の写真は、その頃はただ、思い出が残せば良かった。  
病気をして、もう、登山どころか、旅も出来ない現実を受け入れられない辛さから、たくさんの  
写真や資料を観る事も出来ない、壊れた私の心情から、多くの物を捨ててしまった。

だが、どうしても、無意識の中で、捨てられずに残した物が、いくつか出て来たので、体調の良い  
時に、すこしずつ、整理してみたが、やっと、今、ここで、観て頂ける事が、とても嬉  
しい!!!

どれも、もう10年以上前の写真ですので、すこし、色あせていますが、よろしかったら、観て  
いただければ嬉しいです。

長い一日の終わり

何をするでもなくすぎた今日  
うごきの悪くなった心と体が

少しだけ焦りを感じている  
こんな時意識的に思い出す風景  
この心が飛んでいく場所

いくつもの情景の中で  
決まって貴方の顔が浮かびます  
巨大な氷河の中へ置き去りにしたのですか

ひとりぼっちになったあの長く感じた時間  
突然目の前に現れた笑顔とさしだされた手  
フンザの英雄のような人

温かくて柔らかいなどとはお世辞にも言えない  
ひびだらけの手にすぎるしかない私  
泣きたいほど嬉しかったあの時

私はあの時はじめて貴方の足元を見ました  
老ガイドの履く使い古しのスニーカー  
靴先から頑丈そうな貴方の指先がのぞき見えていた事を

あの情景が今の私に切なさや懐かしさや怖さを  
足元から崩れ落ちて行く夢を今もみてしまう

息苦しさとあの避けようのないすざましい暑さと共に

一台のテレビが伝えるニュースはこんな遠くまでも  
追いかけてきたサリンの恐怖を伝えて  
聞きたくもない名を叫び続ける

ホテルのテラスから見える古城と  
師の眠るウルタルの岩峰が強烈に現れて  
この心だけが今もあの場所へ飛んで行ってしまった

(1995年5月、パキスタン、フンザにて)



君たちはもう立派な大人  
しっかりと生きてるよね  
そして父として母として  
大切な家族を守ってるんだらうね  
あの澄んだ美しい瞳を  
忘れないよいつまでも  
インダスの分流にそって  
淡いグリーンの帯が美しく揺れる  
少し高い台地まで歩く  
荒涼とした風景の中に  
白い大きな山々が輝き  
山里にはアプリコットの花々が咲く  
淡いピンクの薄絹をなびかせて  
桃源郷の春は命の息吹



私が旅をした記録や資料を出して書き込むほどのエネルギーがないので、今、私の中にある記憶や思いだけで書かせて頂きます。

今、私の手の中にひとつの、ラピス・ラズリの小さな原石がある、最初にパキスタンを訪れた、山の師である、長谷川恒男氏のお墓参り、お礼とお別れの言葉を伝えるために、訪れたパキスタンであったが、私はあの世界!宇宙的で!大自然そのもの!私が旅した中で、もっとも神聖なエネルギーを感じて、大自然からの波動を受けた感動的な地で、日々だった。

そんな日々の中で、ひとりの少年の手渡してくれた、この原石が、ラピス・ラズリ、幸せを呼び込む石(花言葉)なのだそうで、この少年と私は、片言の英語で、誰でもがわかる、サンキューなどの言葉でやり取りした中で手渡されたものだった。

私は「おもわず、プレゼントしてくれるの?」と言ったら、少年は、うなずいたので、てっきり、プレゼントされた物だと思い込んでしまったが・・・

今、思うに、あの少年は、おそらく、プレゼントしたのではなく、私に買ってほしかったのだろうと、思われて、本当に申し訳ない事をしてしまったと、この原石を見るたびに、あの少年と一緒に歩いた、火炎地獄のような砂漠の一日を思い出す。

ちなみに、パキスタンでは、違うときは、うなずくのだったと、日本に帰ってから思い出している、バカな、イケナイおばさんであった。

あの少年は次の日も、その次も、一緒に歩いてくれたけれど、あの原石について何も催促しては来なかったのだ、たぶん、私に何か言いたくても、言葉が通じなくて、又、私は頂いた物だとばかり思っていたので、その事で、改めて何も言わなかった。

2度のパキスタン行きは、簡単に書きつくせないほどの、たくさんの思い出と、忘れる事の出来ない、人の優しさと、人間性を見てきていて、私の中で、渦巻きのように、思い出と感動が表れて、上手く表現できない!!!

けれど、いつも思う事は、あの世界で生きる人々が、心穏やかに暮らせる事を願う。

いつの時代も、ほんの一握りの権力者が、多くの人々の平和な日常を奪ってしまうのだ。

私の中では、あの、チャンイの姿と、あの、桃源郷にいた日が、繋がってしまうのです。



<もう一つの風に立つライオン>

ささげれた手が  
乾いた荒野を力強く耕す

ただ水さえここにあれば  
多くの心優しき人が  
飢えることなく

空腹を満たす幸せがある  
昔のように一面に咲く菜の花  
きっと平和を喜び

手のひらのパンをほうばる  
この子らの笑顔に人々は感謝して

この乾いた大地を  
水を求めて掘り続ける  
医者である私は

この純朴な民に何が必要なのか  
それは高い医術ではなく  
ひつ粒の麦が実る大地

麦の穂が揺れる大地  
地雷など踏む事のない安全な大地を望む

春の訪れを喜び  
父も母も息子も娘も爽やかな風に戯れて

清らかなる流れを  
遠い昔を父は語る  
美しい村があったことを

私は医者なのです

けれど直せない病がここにはあるのです

実りの無い荒れた大地  
乾きすぎて無情に吹く風  
メスの代わりに何を持てば

この子らに笑顔を  
この母がパンを焼き  
この父が大地に感謝し

喜びのダンスを舞う  
花々が咲き乱れる  
本当の大地に変わるのだろうか

☆☆☆

穏やかで、ゆっくりとしたある歳のお正月も、世界のいろんな所から情報が届き、心を痛めていた時、ある、テレビ番組で、さだまさしが唄う、「風に立つライオン」を聴いた。

アフリカの大地で、医療活動をしている方の事を書いたそうだが、この曲は私も大好きで今までも何度も聴いているが、その度に、私には思い出す方がいる、もう何十年も、アフガニスタンで、医療活動しながら、アフガニスタンの人たちが、どうしたら、平和に暮らして行けるのかを、本当に良く考えて、そこの人々と共に井戸を掘り、水路をつくり、活動を続けている方です。

私はただ、祈る事しかできないのですが・・・

新年を迎えて、今年こそ、良い日々でありますように・・・

(この年からもう何年が過ぎたのだろう、2011年の年末、現在のパキスタンの現状は分からないがせめてあの地に住む人々の幸せを願う事しか私は出来ない)



今、私に見える世界は、体の不自由と外出が出来ない事で小さな我が家の庭、そこに咲くいくつかの花たちが、私を慰めてくれる。

いつまでも、あの頃を忘れられずに、思い出にすがる、生き方は、すこし、情けなく思うけれど、確かに、山に魅せられていた日々は、私の輝ける日々だった。

特に、2度のパキスタン行は、命のキケンさえ感じる旅であったけれど、何ものにも変えがたい、大切な思い出だ。

山の師である、長谷川さんにお別れのために登った、ウルタルのベースでのあの体験は、今も不思議な、天上の世界を見た気がしたし・・・

4000mの高地を、落石を避けながら、走る、苦しくて、足がもつれてもなお、力走しなければ、肩越しに死がせまる、怖さ・・・

ナンガ・バルバットのベースでは現地のスタッフを信じすぎて、私自身の装備不足！零下の寒さに薄い毛布一枚で耐え、高山病で幻覚を見ながらの幾夜・・・

ギルギットでの朝の散歩で、出会った女達に「口紅」がほしいとねだられたが、断ったら、石をぶつけられた、ちょっと、怖かった事。

ひとつの思い出をたぐれば、まるで、じゅずつながらのように、次々と浮かぶ思い出や体験は一冊の本が書けるほどの、楽しく、そして、耐えられないほどの、暑さと寒さを、思い出す・・・

2005年秋にパキスタンでも、7万以上の人が犠牲になった大地震が起きています、今、どうなっているのか、あまり情報がなく、気になっていますが、私には、ただ、祈る事しか出来ませんが、政情不安もあります、私は、あの瞳の美しい子供たちが、平和で、穏やかに暮らせる事、ただそれだけが、願いです。

3回にわたって、見ていただきまして、ありがとうございました。

まだまだ、たくさんの体験談や不思議、又切ない感情もありますが、写真の保存があまりなくて、今更ながら、捨ててしまった事が残念です。

又、いつか、思い出のひとつ、ひとつを、書けたらと願っています。

自己満足の世界ですが、見ていただけて、本当に、ありがとうございました。

10数年前の私でしたが、今はかなり美変身？してますので載せても、いいかな、なんて思っ  
ながら・・・



---

まだ、たくさん載せたいものがあるのですが、体力が問題ありで・・・  
つづけられたら、つづきを頑張ってみます！